

Title	植物の漢名と近世日本の漢詩：萩の花の呼称を例に
Sub Title	Knowledge acquisition of Chinese names for plants and its influence on the Sinitic poetry composition in early modern Japan : poems that depict bush clover flowers
Author	合山, 林太郎(Goyama, Rintaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.60 (169)- 78 (151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0060">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0060</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 植物の漢名と近世日本の漢詩

— 萩の花の呼称を例に —

合山林太郎

はじめに

日本の植物の名称は、ほとんどの場合、漢字で記すことができるが、これらの漢字の名称には、中国において生まれ、日本に渡来した漢名と、日本で生まれ、日本でのみ流通する、日本独自の漢字名とがある<sup>1</sup>。

具体的に見てゆこう。多くの場合、中国の漢名が日本においても流通している。たとえば、「梅」「桃」「菊」などは、いずれも中国の呼称がそのまま日本で用いられたのであり、指し示す対象が、国や地域の間で大きく異なるということはない。しかし、漢名以外に、日本独自の漢字名が頻用される場合がある。例を挙げるならば、秋の七草の一つとして知られる、なでしこは、漢字で「撫子」と書くが、これは、日本独自の語であり、日本以外の地域では通じない。なでしこの漢名は、「瞿麦」あるいは「石竹」となり、中国あるいは東アジアで理解してほしい場合、こちらの語を用いる必要がある。

漢名と日本独自の漢字名との関係は、やや複雑であり、たとえば、同じ漢字を用いながら、異なる事物を指し示す場合もある。やはり秋の花として知られるおみなえしは、日本では「女郎花」と記す。これも、日本のみで流通する漢字名であ

り、漢名は、「敗醬」などとなる。注意すべきは、「女郎花」は、中国では別の花を指すことである。たとえば、陸游の「祭  
祭女郎花、忽滿庭前枝（祭々たる女郎花、忽ち庭前の枝に満つ）」（「病中觀辛夷花」）などがそれに当たるが、一般に中国で  
は、「女郎花」は、木蘭あるいは辛夷を指すとされる。

このように、植物の漢字名は、漢名と日本独自の漢字名とに大別されるのであるが、漢詩文においては、漢名が優先的に  
用いられることが多い。時代や人によっても違いはあるが、基本的に、儒学者や漢詩人は、中国の古典を学んでおり、彼土  
の規範に合わせてようとする。別の言い方をすれば、中国あるいは日本以外の東アジアの諸地域の文人たちからも理解される  
よう、漢名を選択する。かりに日本固有の漢字名を用いる場合でも、漢名による説明を注記することがしばしばである<sup>3</sup>。

このようななか、呼称の変遷の過程が明瞭に分かり、かつ、文芸に影響を与えたという点で興味深いのが、はぎである<sup>4</sup>。  
周知の通り、はぎの花は、古来、日本の文学にしばしば登場しており、とくに和歌においては、鹿、あるいはその妻問い、  
また、露などと取り合わせて詠われた。

今日においては、はぎには「萩」の字を当てることが多いが、これはいわゆる国訓である。このほか、はぎには、いくつ  
かの漢字名があるが、江戸時代に大きな変化が起こり、それが、漢詩におけるはぎの詠出にも影響を与えたと考えられる。  
本稿では、その概要をたどる。なお、漢字でどう書かれたかについて論じるため、一般的な意味で用いる場合、本論では、  
すべて「はぎ」と平仮名で表記することとする<sup>5</sup>。

## 一 はぎの漢名の不在と林鶯峰の悩み

古代・中世において、はぎには、漢字によって表記し得る呼称が複数あった。主要なものを挙げるならば、今日でも用い  
られる「萩」に加えて、「芽」「鹿鳴草」「波木」「芳宜」などがある。ただ、これらの呼称は、いずれも日本においてのみ流  
通したか、または、その出典が明らかにできない。したがって、はぎの漢名は不明とされ、実際に近世初期には、このこと  
に悩む林鶯峰のような儒学者もいた。以下、そのあらましについて見てゆこう。

はぎの花は、古代から文献に登場するが、たとえば、『万葉集』において、はぎの花は、集中、最も多く詠まれた花であり、『吾丘尔 棹壯鹿來鳴 先芽之 花婦問尔 來鳴棹壯鹿』(卷八、一五四一番、大伴旅人)などのように、「芽」や「芽子」と記されている。また、『続日本後紀』には、「芳宜花宴(謙)」といった用例が確認できる(卷三・承和元年八月及び卷一四・承和二年八月の条)。

古代の概況を把握するために、『和名類聚抄』(二十卷本)を紐解くならば、まず、はぎは、「鹿鳴草」で立項されている。『爾雅集注』に「萩一名蕭」との記載があることを挙げ、和名は「波木」であると記している。また、『弁色立成』や『新撰万葉集』には「芽」、「国史」(筆者注 先に言及した『続日本後紀』のこと)に「芳宜花」の用例が、『楊氏漢語抄』に「鹿鳴草」の用例があると述べている。

古代の漢詩には、こうした呼称を用いて、はぎを詠んだものも確認できる。たとえば、『新撰万葉集』巻上には、「秋芽一種最須憐、半萼殷紅半萼遷(秋芽 一種 最も須らく憐れむべし、半萼の殷紅 半萼は遷れり)」、『新撰朗詠集』(秋部)の「二秋有蕊号芽花、麝子鳴時此草奢(二秋に蕊有り 芽花と号す、麝子の鳴く時 此の草 奢る)」、『本朝無題詩』巻二(植物)に載る、大江佐国の「縁底茲亭感禁難、鹿鳴草是足憐看(底に縁りてか 茲の亭 感ひ禁じ難き、鹿鳴草は是れ憐れみ 看るに足る)」、「(翫鹿鳴草)」などがそれに当たる。「芽」や「鹿鳴草」を用いたものである。

ただ、これらの呼称のほとんどは日本独自の漢字名である。「芽子」については、今日、中国由来である可能性が議論されているが、<sup>10</sup> 確かな形で用例を確認できない。なお、用いる字の違いは、植物学上の分類と対応しているとの指摘がある。<sup>11</sup> 中世においては、たとえば、歌学書の『蔵玉和歌集』に、「初見草」「庭見草」「古枝草」「秋遲草」「紅染草」などの萩の異名が掲載されているが、これらの呼称はいずれも和語を漢字によって表記したものであり、漢詩文とは馴染まない。

こうしたローカルな漢語を、詩中に用い得るかの判断は、時代や属する集団、作者個人の意識などによって、大きく異なっている。詩の読者を、自身の周囲の人々、あるいは日本の習俗を知る者に限って考えるならば、日本固有の漢語を用いることも問題とは感じないであろう。しかし、自身の記す詩文が、より普遍的に理解されるものであってほしいと思う人物に

とつては、漢名がないということは、その事物を描こうとする際に、大きな障壁となったと考えられる。

はぎについても、古代の漢詩の例に見られるように、日本で通行する漢字名をそのまま詩中で用いることは可能ではある。しかし、多くの儒学者や漢詩人は、そのようには考えず、はぎを取り上げることに逡巡を感じたと考えられる。

このことを端的に示すのが、林鶯峰の議論である。鶯峰は、萩の花について、二編の作品を残している。一つが、寛文二年（一六六二）に書かれた「萩花賦」（『鶯峰先生林学士文集』巻四三）であり、もう一つが、延宝五年（一六七七）に書かれた「芳宜説」（同巻二二）である。

「萩花賦」において、鶯峰は、『和名抄』から呼称を引きつつ、はぎは和歌には作例が多いが、中国では取り上げられていないこと、<sup>12</sup>状況により様々な美しさを見せることなどを述べている。具体的には、はぎの花が、農婦の慰めにも、懐郷のよすがともなり、その花の風情は、乙女の閨むすめにも、隠者の家にも似合い、さらには、蘭などと同様、貴族の衣服を飾る具にも、菊と同じように秋の前栽の楽しみにもなる、と詠っている。<sup>13</sup>その上で、日本では、菅原道真（先に触れた『新撰万葉集』中の作）と大江佐国（『本朝無題詩』中の作）が詩に詠い、称賛されているが、<sup>14</sup>『詩経』小雅「鹿鳴」に詠われた「萃」<sup>15</sup>「蒿」「芩」などのようであれば、中国文学の文脈においても十分に尊重されるはずであったのに、それが叶わなかったのは問題だと主張している。<sup>16</sup>

「芳宜説」では、「芳宜」や「鹿鳴草」などの古くからのはぎに関する漢字名を列挙し、その名の由来を推測している。たとえば、「萩」の字については、秋の花であるため、草冠に秋を組み合わせた「萩」の字が用いられたのだろうと述べている。<sup>17</sup>

とくに注目すべきは、鶯峰が、『史記』や『漢書』の貨殖列伝における「萩」の字の用例について指摘している点である。たとえば、『漢書』では、その収入が、千戸を持つ封侯に等しい人々として、山で千章（章は材木を数える単位）の「萩」を持つ者（「山居千章之萩」）、淮水の北、滎沢の南、河水・濟水のあたりで、千本の「萩」の樹を持つ者（「淮北滎南河濟之間千樹萩」）を挙げている。顔師古注には「萩即楸樹字也（萩は即ち楸樹の字なり）」とあり、ここでの「萩」は「楸」、すなわち、樹木の一種であるひさぎ、あるいは、きささげだと、通常、理解されている。<sup>18</sup>

鶯峰は、このことを念頭に置きつつ、「萩花賦」において、次のように述べている。<sup>19)</sup>

若夫河濟千樹之等千戸侯、未知指此艸耶、果其木部之楸乎。況夫富民貨殖之利、非風雅之士所求。

夫の河濟千樹の千戸の侯に等しきが若きは、未だ此の艸を指すや、果して其の木部の楸なるやを知らず。況んや夫の富民貨殖の利の、風雅の士の求むる所に非ざるにおいてをや。

すなわち、日本人がはぎを表すために「萩」の字を用いた場合、それが、『史記』や『漢書』の用例のように、材木を意味してしまふことを懸念している。また、「萩」の字が、「貨殖列伝」のような、富の追求という、はぎの花の風情とはかけ離れた主題を人々に想起させてしまふことも、問題視している。

たとえば、「女郎花」のように、同じ漢字名であっても、日本と中国で指し示す対象が異なる場合があることは、すでに論じた。ただ、これらは、別の花を示すということであつて、花であることは、中国、日本どちらでも変わらない。これに対して、「萩」の字は、樹木と花というように、指し示す事物が大きく異なっている。甚だしい理解の齟齬をもたらすものとして、「萩」の字は問題視されていたのである。

## 二 近世中期における本草学と漢名の普及

鶯峰が生きた近世初期において、はぎの漢名はなお明瞭ではなかった。そのやや後の時代を生きた伊藤仁斎（寛永四年（一六二七）～宝永二年（一七〇五））も、なお、状況は変わらなかつたようである。仁斎は、「萩」を題とする詩を作っているが（『古学先生詩文集』詩集・卷二、享保二年（一七一七）刊）、自注に「按、萩艸名。叢生秋開紫花如豆花（按ずるに、萩は艸の名なり。叢生し、秋に紫花を開き、豆花の如し）」と記している。萩は草類であり、秋に豆の花のような紫色の花を咲かせると述べているのであるが、はぎの漢名を知らないために、こうした形態の描写に終始しているのであろう。

しかし、この問題は、近世中期以降、解決に向かうことになる。新たな潮流は、本草学から起こった。すなわち、日本の本草学者たちが、明代に刊行された花や救荒作物についての書籍を研究し、これらの文献に載る植物が、日本のどの植物にあたるかの同定を試みた。これにより、はぎは、「胡子花（胡子枝）」「随軍茶」「観音菊」「天竺花」という四つの漢名を新たに獲得することとなったのである。

その具体的な経緯は、すでに横山潤『秋菽の譜』（安永八年（一七七九）刊）<sup>20</sup> や佐原菊塙『秋野七草考』（文化七年（一八一二））などにまとめられているが、あらためて見てゆこう。

まず、新たに登場した呼称のうち、「胡枝花」及び「随軍茶」は、明の朱橚（周憲王）が著した『救荒本草』（永楽四年（一四〇六））に由来するものである。『救荒本草』は、飢饉の際に食用に用いることができる植物を解説したものであり、それまでの文献が載せていない多くの植物について説明している。

本草学者松岡恕庵は、享保元年（一七一六）に、この書を『周憲王救荒本草』一四卷として和刻し、その際に、特定し得たものについては、植物の名に和名をルビのかたちで書き添えた。はぎについては、卷八に載る「胡枝子」に、「ハギ」と付訓している。該当の箇所は、「胡枝子<sup>キ</sup> 俗亦名随軍茶、生平沢中。有二種。葉形有大小。大葉者類黑豆葉。小葉者莖類薯艸、葉似苜蓿葉而長大。花色有紫白。結子如粟粒大。氣味与槐相類、性温（胡枝子 俗に亦た随軍茶と名づく。平沢の中に生ず。二種有り。葉の形に大小有り。大葉の者は黑豆の葉に類す。小葉の者は、莖は薯艸に類し、葉は苜蓿の葉に似て長大なり。花の色に紫白有り。子を結べば、粟粒の大なるが如し。氣味は槐と相ひ類す。性は温」というものである。ここに記された葉や莖の形状、花の色などを見て、松岡は、「胡枝子」が日本のはぎにあたるかと推定し、和名を添えたと考えられる。<sup>22</sup>

「天竺花」及び「観音菊」という呼称は、明・王路『花史左編』（万曆四十六年（一六一八）刊）の記述に基づく。『花史左編』は、花について品評・分類を行った書であり、多数の花の名を掲載しているが、卷四（「花辨」）に、「観音菊 天竺花 是也。此非南天竺。或呼為落帚花、亦非也。落帚別是一種。自五月開至七月。花頭細小、其色純紫、枝如嫩柳。其幹之長与

人等。或呼為觀音菊、蓋取錢塘有天竺觀音之義也（觀音菊 天竺花、是れなり。此れ南天竺に非ず。或ひは呼びて落帚花と為すも、亦た非なり。落帚は別に是れ一種。五月より開きて、七月に至る。花頭は細小にして、其の色は純紫にして、枝は嫩柳の如し。其の幹の長きことは人と等し。或ひは呼びて觀音菊と為す。蓋し錢塘に天竺觀音有るの義を取るなり」との記載があった。なお、『花史左編』は、和刻はされていないが、近世期に、日本において広く読まれたと考えられる。

この説明から、天竺花、漢音菊をはぎであると認定したのは、貝原益軒（寛永七年（一六三〇）～正徳四年（一七二四））及び貝原好古（寛文四年（一六六四）～元禄一三年（一七〇〇）、益軒の養子）であったと考えられる。好古の『和爾雅』（元禄七年（一六九四）刊）は、はぎについて、「天竺花」で立項し（巻七、「艸木門」）、『花史左編』の説明を引用するとともに、「倭俗用萩字者非是（倭俗、萩の字を用ふる者は、是を非とす）」と述べている。また、益軒は、自身の著『大和本草』（宝永六年（一七〇九）刊）に同書を引用し、その際、「天竺花」に「ハギ」とルビを振っている。

これらの新たに認識された漢名は、辞典や類書、あるいは、作文や作詩のための字典を通じて、社会内に定着してゆく。寺島良安『和漢三才図会』（正徳二年（一七二二）自序）は、巻九四之末「湿草」の部に、はぎを載せているが、立項名を「胡枝花」としている。古代以来使用されていた日本独自の漢字名とともに、「随軍茶」「天竺花」「觀音菊」などの新たに登場した漢名を掲示した。

より後代のものである、柴野栗山『雑字類編』（明和元年（一七六四）序）には、「胡枝花、天竺花、随軍茶」とあり、また、山本北山『文藻行潦』（天明二年（一七八二）刊）には、「天竺花 ハギ・花史（筆者注 『花史左編』が出典の意）」と説明しており、はぎの漢名が、広く浸透していたことがうかがえる。

以上のような状況のもと、漢詩人たちも、漢名を用いて、自ら詩のなかではぎを詠うことが通常となった。たとえば、近世後期を代表する漢詩人大窪詩仏（明和四年（一七六七）～天保八年（一八三七））は、次のように愛らしいはぎの花の様子を詩中に描いている。



賃得茅菴小似舟、一担行李此淹留。胡枝花發無人管、付与吟翁占斷秋。

賃<sup>か</sup>り得たり 茅菴の小なること舟に似たるを、一担の行李 此に淹留す。胡枝花 發<sup>はなほら</sup>くも 人の管する無し、吟翁に付与して 秋を占斷せしむ。

〔詩聖堂詩集二編〕卷六

詩の大意は、舟のように小さな粗末な庵を借り、一個の行李とともにそこに逗留すると、はぎの花が人知れず咲いており、それにより、秋の雰囲気を満喫できる、というものである。「吟翁」は、詩仏自身のこと。「胡枝花」という呼称を用いながら、詩仏は、はぎの風情を巧みに描写している。

詩仏には、このほかに、「萩 胡枝花邦俗呼為萩花（萩 胡枝花は、邦俗、呼びて萩花と為す）」（『詩聖堂詩集初篇』）という題の詩もある。ここでは、詩仏は、「萩」「萩花」という日本式の名称を用いているのであるが、同時に、「胡枝花」という漢名を使つて、それが日本のローカルな名称であることを説明している。このように注記することができるならば、「萩」の字の意味を誤解されることもないであろう。

詩仏に限らず、この時期の漢詩人は、たとえば、菊池溪琴「胡枝花」（『溪琴山房詩』卷六）や藤井竹外「白胡枝」（『竹外二十八字詩』卷上）などの詩題に見られるように、はぎを詩に賦す際に、漢名を用いるようになる。

近世後期、具体的には一八世紀後半以降、日本の漢詩の世界では、清新性靈の説が浸透し、身近な自然を詠うことが頻繁になされた。<sup>23</sup> 当然、草花などもその対象となるわけであるが、はぎの花については、近世中期の漢名についての知識の更新がなければ、多くの漢詩人たちにとって、そもそも詩中に詠み込むことが難しかったと思われる。文学の動きが、本草学の動向と緊密に関係していたことがうかがえるのである。

### 三 はぎの漢名に対する戸惑いと反発

近世中期以降、はぎの漢名として、「胡子花」「随軍茶」「観音菊」「天竺花」という四つの呼称が新たに知られることとなった。このことは、様々な議論を生むこととなる。

まず、近世後期の儒者林述斎（明和五年（一七六八）～天保十二年（一八四一））は、なぜ、中国と日本で花に対する愛好がこれほど違うのか、という疑問を吐露している。

胡枝花似紫雲横、斌媚風姿太有情。但怪唐人無賦詠、救荒譜裏徒存名。

胡枝花は 紫雲の横へるに似たり、斌媚たる風姿 はなは 太だ情有り。但だ怪しむ 唐人の賦詠すること無くして、救荒譜裏に徒らに名を存するを。

（『谷口樵唱』、文化五年（一八〇八）刊）

詩は、はぎの花が咲き乱れる様子について、紫の雲をたなびくようであり、その様子は甚だ風情があるにもかかわらず、中国では、この詩を詩文に詠むことがなく、救荒書の中にむなしくその名をとどめているのは、なぜなのだろうか、と述べている。ここで念頭に置かれているのは、『救荒本草』である。

中国と日本の華をめぐる文化的な慣習の違いに戸惑いを見せていることは、近世初期の林鸞峰と同じであるが、述斎の場合、中国では、はぎが救荒植物として扱われているらしい、という認識を持っている分、彼我の花の文化に対するギャップは大きなものと考えられたであろう。

次に、「胡子花」「随軍茶」「観音菊」「天竺花」といった漢名が、漢詩人たちから、両手を挙げて喜ばれたわけではないという点に注意する必要がある。漢語は、それが意味する対象とは別に、構成する漢字や含まれる語句によって、自ずと独自

のイメージを持つこととなる。こうした点から、これらの漢語を用いることに反対する意見も提出されている。

近世後期の儒者東夢亭（寛政三年（一七九六）〜一八四九）は、はぎについて、漢名よりも、「萩」の字を用いることを主張した。このことは、『鉅雨亭随筆』巻中（嘉永五年（一八五二）刊）及び『夢亭詩鈔』巻中（万延元年（一八六〇）刊）には、次のような記述がある。

ある日、「河崎生」が、師の韓聯玉とともに来訪し、自分たちが作ったはぎの花の詩に次韻するよう、夢亭に求めたことがあった。このとき、「河崎生」らは、はぎを示す語として、「随軍茶」を使っていたのであるが、これに対して、東亭は、「萩」は秋の花であるから、草冠に秋の字で構成する「萩」の字こそがふさわしく、そうした風情の感じられない「随軍茶」などの漢名は、排すべきであると主張したと言ふ。<sup>24</sup>

夢亭が「萩」の字を選択するのは、「秋」の字が入った「萩」の方が、季節感が感じられるからであるが、もう一つの重要な理由があった。それは、「萩」の字ではぎを論じたと思われる漢籍を知っていたということである。<sup>25</sup>

該当する書を、夢亭は、『中山伝信録』と述べているが、この文献には、そのような記述はおそらくない。『琉球国志略』<sup>26</sup>と取り違えたのではないかと推測される。同書の巻一四には、「萩枝条繊弱如柳小。葉如榆、亦作品字。九月開花、葉間遍滿、紫艷如匾豆花形（萩は、枝条は繊弱にして柳の如く小なり。葉は榆の如く、亦た品字を作す。九月に開花し、葉間に遍滿し、紫艷にして匾豆の花の形の如し）」という説明が見られる。なお、『琉球国志略』は、清の外交官周煌が、琉球を訪れて得た知識を記したものであるが、なぜ「萩」という語がここに記録されることになったかははっきりしない。<sup>27</sup>

いずれにせよ、夢亭は、文献上でも「萩」という字を使ってよいという確かな証拠を得たと考え、次のような詩を作り、自らの所信を示した。

花称天竺或胡枝、未有佳名副艷姿。珍重中山伝信録、草頭秋色令人知。

花は称す 天竺或ひは胡枝と、未だ佳名の艷姿に副ふこと有らず。珍重す 中山伝信録、草頭の秋色 人をして知らしむ。

詩において、夢亭は、「天竺花」や「胡枝花」などの漢名は、はぎの愛らしい姿を表現するのにふさわしいものとはいえない、と述べている。その上で、「萩」という語が、秋の草花の意味で用いられることを人々に示した『中山伝信録』という資料（筆者注 実際は『琉球国史略』と考えられる）を重視すべきであると説いている。

すでに述べたように、近世後期以降のはぎを詠った詩の多くは、漢名を用いている。ただ、中には、とくに説明のないかたちで「萩」という表記を用いた例もある。大沼枕山の「紫萩枝勝紅珊瑚好、和露揮来幾往還（紫萩の枝は紅珊瑚の好きに勝る、露に和して揮ひ来る 幾往還）」（「秋郊調馬」『枕山詩鈔三編』巻下、転結句）や「山気初涼紫翠開、高台寺裏看萩来（山気 初めて涼しくして 紫翠 開く、高台寺裏 萩を看来たる）」（「過高台寺」『蘆洲詩鈔』巻上、起承句）などがそれに当たる。

述斎や夢亭の議論は、こうした「萩」の字をそのまま用いる近世後期の作例の背後に、何らかの意図がある可能性を示唆しているだろう。単に漢名を知らないといった理由ではなく、中国におけるはぎへの関心の低さに対する戸惑い、あるいは、漢名の字面が与える印象などの点から、選択的に「萩」の字を用いたことが推測されるのである。

#### 四 「天竺花」という呼称がもたしたものの

新たに登場した漢名の中で、「天竺花」は、インドあるいはその周辺の地域を指す「天竺」という語を、花の中に含んでいる。このことは、はぎに新たな連想とともに詩に詠う契機となった。

たとえば、はぎの花は、仏教寺院に咲くことも多い。「天竺花」に含まれる「天竺」という語は、インド由来の仏教と結びつきやすく、それゆえに様々な表現を可能にする。

江戸後期の詩人北条霞亭（安永九年（一七八〇）～文政六年（一八二二））は、文化八年（一八一二）の秋に洛東の方広

寺を訪れている。災禍のためであろうか、このとき本堂などは焼け焦げて、廢墟となっており、あたりには、篤志家の手ではぎが植えられていたと言う。その様子について、霞亭は、次のように詠っている。

儼然何在古先生、花草空餘天竺名。莫是当年飛化処、滿身瓔珞擲來成。

儼然 何いづくにか古先生の在る、花草 空しく餘す 天竺の名。是れ当年の飛化せる処なからんや、滿身の瓔珞 擲なげち來りて成る。  
(「方広寺仏堂焦墟、好事者盛植天竺花、戲詠」、『嵯峨樵歌』〔文化九年(一八一二)刊〕)

被災した寺の様子を歌っているが、注目すべきは、起承句である。「古先生」は、元々は老子の意味であるが、ここでは「天竺」が付されている。王維の「過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若(乗如禪師、蕭居士が嵩丘そうきうの蘭若らんじやに過よぎる)」詩の尾聯に、「深洞長松何所有、儼然天竺古先生(深洞 長松 何の有る所ぞ、儼然たる天竺の古先生)<sup>30</sup>」という詩句があることを踏まえつつ、ここ方広寺には、「天竺」の「古先生」と言うべき仏はおらず、ただ、はぎの花のみがむなく「天竺」の名を留めているだけであると詠っている。

もう一つ、「天竺花」を豊臣秀吉の事跡と関わりながら詠うことも試みられている。仙台藩の出身で、幕末期の江戸で活躍した儒者である齋藤竹堂(文化一二年(一八一五)～嘉永五年(一八五二))は、天保十一年(一八四〇)に西日本を遊歴しているが、秀吉の正室北政所が建立した高台寺を訪れた際に、この寺の名物であったはぎの花を、壬辰戦争(文禄・慶長の役・壬辰倭乱いんしんわらん)と関わりせながら詠った。詩は次のようなものである。

英雄有胆吞蛮貊、何論支那州八百。可惜將星落半途、西師不渡鴨江碧。野草潤花香滿地、遺像零落百年寺。上人漫自說  
豊公、誰知英雄未了志。彼何為者新覺羅、一拳吞奪明山河。使公有成亦當爾、不怪東西婦一家。吁嗟乎新覺羅且如此、

霸迹空開天竺花。

英雄に胆有り 蛮貊を吞む、何ぞ論ぜん 支那の州八百。惜しむべし 将星 半途に落ち、西師 渡らず 鴨江の碧。  
野草 潤花 香は地に満ち、遺像 零落す 百年の寺。上人 漫りに自ら豊公を説く、誰か知らん 英雄 未だ志了  
せざるを。彼は何する者ぞ 新覚羅、一挙 吞奪す 明の山河。公をして成す有らしめば 亦た当に爾るべし、怪しま  
ず 東西 一家に帰するを。吁嗟乎 新覚羅すら且つ此の如し、霸迹 空しく開く 天竺花。

(「高台寺観天竺花、寺有豊太閤像」『報桑録』)

「鴨江」は鴨緑江のこと、「新覚羅」は清を建国した女真族の愛新覚羅氏のことであろう。この詩において、基本的に竹堂は、秀吉の海外侵略を肯定する立場をとっている。秀吉が病死したので、鴨緑江をわたることができず、清によって明が滅ぼされることとなったが、もしこの挙が成就していれば、秀吉は、最終的に、覇権を握ることができていたであろうと論じている。

注目すべきは、竹堂が、この詩の末尾(傍線部)に「天竺花」という語を置き、これに対して、後藤春草が、「天竺花用得新。従前莫人思及此(天竺花、用ひ得て新たななり。従前、人思の此に及ぶことなし)」と評していることである(『報桑録』)。これは、基本的に、高台寺がはぎの名所であることを踏まえてのものと思われるが、春草の言う前人が思いつかなかった新奇な着想とは、「天竺」という異域の名を含む花の名を用いて、秀吉の野心を象徴的に詠ったことを指していると思われる。実際に、この時期、ひろく読まれた軍記『重修真書太閤記』には、秀吉についての説明の中に、「此威風を以て押行ば唐天竺迄打従へん事難からじと」(五編卷一一、「秀吉中国退治首途の事、并信長秀吉陣押見物の事」)などの天竺を含む表現が見える。以上のように、「天竺花」という呼称は、様々な新しい表現を生み出したのである。

おわりに

本稿では、はぎの花を例に、それが、どのように漢字で表記されたかを追った。「萩」をはじめとして、近世以前に、日

本で流通していた漢字の呼称は、日本でのみ流通していたものであり、漢詩文に用いるには懸念があった。一八世紀以降、明代の中国で刊行された植物に関する文献から、「胡子花」「隨軍茶」「觀音菊」「天竺花」などの、はぎの漢名が特定された。

これらの新たに流通した漢名は、文人たちがはぎを詠うことの障壁を低くし、はぎについての様々な詩が作られることに貢献した。その一方で、漢名よりも「萩」の字を詩文中に用いるべきだという意見も看取され、語そのものが与える印象に對して、詩人たちが敏感であったことが分かる。このほか、「天竺花」などの呼称については、「天竺」という語が持つ特殊な意味を用いた詩作が行われていたことが確認できる。

呼称の問題は、一見、文学と関わらないように見えるが、対象を取り上げる前提として大きな意味を持っており、また、詩文の内容や表現にも影響を与えているのである。

## 註

1 本稿における日本固有の漢字名とは、基本的には、漢字の国訓、和名を漢字表記したもの、和製漢語などの総称として用いている。なお、本来、漢名に対応するのは、和名である。

2 六如『葛原詩話』（天明七年（一七八七）刊）卷三「女郎花」では、「吾邦ニテハ、敗醬花ヲ名テ女郎花ト云。異邦ニテハ白棠天ハ木蘭花ヲサシテ云（略）」と述べ、さらに陸游の詩を挙げながら、「然レバ木蘭ハ即辛夷ナリト」と論じている。

3 次に掲げる館柳湾の「又一絶、用邦俗所呼花名（又一絶、邦俗の呼ぶ所の花の名を用ふ）」詩（『柳湾漁唱二集』）は、こうした意識をよく表している。「尾花」「芭花」招処晚風斜、露艸【淡竹葉】叢辺停小車【旋覆花】。尽日秋園話何事、仙翁花【剪秋羅】对女郎花【敗醬草】。この詩は、「尾花」「露艸」「小車」「仙翁花」「女郎花」という日本の漢字名を詩中に詠み込みながら、秋の自然を描いた詩であるが、それぞれの植物の名称の下には、漢名で注記がされている（本稿では、隅付き括弧で表示）。正格の

漢詩の中で用いる場合、日本で流布する漢字名だけでは十分ではないと考えられ、このような措置がとられたのであろう。なお、漢名の注記を抜いたかたちで訓読を示すと、以下のようになる。「尾花の招く処 晚風 斜めなり、露艸の藪むらがる辺りに小車を停む。尽日 秋園 何事をか話す、仙翁花は女郎花に対す」。

4 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編『改訂新版 日本の野生植物』第二巻、平凡社、二〇一六年）によれば、日本には、キハギ、チョウセンハギ、マルバハギ、ツクシハギ、クロバナキハギ、ヤマハギ、ミヤギノハギ、ネコハギ、サガミメドハギ、シベリアメドハギ、メドハギ、イヌハギ、マキエハギの二三の種が自生するとされる。なお、不明種として、コシキジマハギがある。

5 本稿におけるはぎは、あくまで、文学作品に登場する、あるいは、人々が一般的に考えるはぎを指している。片仮名で記さないのは、今日の植物学における種を指しているわけではないからである（種は片仮名で表示する）。

6 該当箇所は以下の通りである。「鹿鳴草 爾雅集注云、萩一名蕭。【萩音秋、一音焦。蕭音宵。和名波木。今案、牧名用萩字、萩倉是也。弁色立成新撰万葉集等用芽字。唐韻芽音胡誤反。草名也。国史用芳宜草三字。楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字、並本文未詳】（鹿鳴草『爾雅集注』に云く、萩、一名蕭。【萩、音は秋、一に音は焦。蕭、音は宵。和名は波木。今案するに、牧名に萩の字を用ゆ、萩倉、是れなり。『弁色立成』『新撰万葉集』等、芽の字を用ふ、『唐韻』に芽の音は胡誤の反。草の名なり。国史に芳宜草の三字を用ゆ。『楊氏漢語抄』に又た鹿鳴草の三字を用ゆ。並に本文は未だ詳びらかならず）。

7 前掲『新撰万葉集注釈卷上（二）』、半澤幹一・津田潔『対釈新撰万葉集』（勉誠出版、二〇一五年）などを参照。

8 柳澤良一注釈『新撰朗詠集全注釈 一〜四』（新典社、二〇一一年）などを参照。

9 本間洋一『本朝無題詩全注釈』（新典社、一九九二〜一九九四年）などを参照。

10 古代のはぎの名称については、すでに狩谷校斎『箋注倭名類聚抄』に詳しい考証がなされているが、新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈卷上（二）』（和泉書院、二〇〇六年、四九〜五八頁）に、三木雅博による「芽」「芽子」についての詳細な説明がある。たとえば、「芽子」について、中国の本草書などにも載る「牙子」という植物にあたるのではないかという説があることを紹介しつつ、「牙子」とはぎとは別の植物ではないかとの立場を取っている。寺井泰明『植物の和名・漢名と伝統文化』（日本評論社、二〇一六年）は、「芽」や「萩」以外に、「蕭」や「葦」なども含め、中国と日本のはぎをめぐる認識とその交渉の可能性について論じている。なお、韓半島におけるはぎの呼称については、新井白石『東雅』には、来朝した朝鮮通信使が、はぎの花を見て「柎」であると述べたことを記している。このほか、木下武司『和漢古典植物名精解』（和泉書院、二〇一七年）第二八



章第三、七節に、古代のはぎの文献的な記述とその研究の状況について、詳細な記述がある。

11 前掲『改訂新版 日本の野生植物』第二巻には、古代のはぎについて、「日本人は古来（萩）を非常に愛好し、（万葉集）をはじめ多くの和歌、絵画、文学作品に表現し、また庭風寺院などに広く栽植している。（万葉集）のころのハギ（芽子、秋芽）は山野に自生していた今日のヤマハギ、ビッチュウヤマハギまたはツクシハギを指したと思われる。のちに平安時代ころからの（萩）は、庭園などに植えられていたミヤギノハギを指したと推測される。栽培ミヤギノハギはおそらく中国原産の野生種が移入されたものと思われる」（二七七頁）との説明がある。

12 該当箇所は以下の通りである。「萩之為名也、曰蕭、曰芽、訓曰波木、考諸源順所加。然未聞称於中華。唯盛于本朝倭歌之家（萩の名為るや、曰く蕭、曰く芽、訓じて曰く波木、諸を源順の加ふる所に考ふ。然れども未だ中華に称するを聞かず、唯だ本朝倭歌の家に盛んなり）」。

13 該当箇所は以下の通りである。「或是催刈田、則農婦相携。或以是憶回郷、則夢魂転迷。或以是代芍薬之贈、其艶粧通於処女之闈、或以是栽蓬華之戸、其幽操協於閑翁之棲。或以是触宮人之袂、何異蘭佩之締。或以是成秋庭之遊、可對菊籬同題（或ひは是を以て刈田を催せば、則ち農婦相ひ携へ、或ひは是を以て回郷を憶へば、則ち夢魂転た迷ふ。或ひは是を以て芍薬の贈に代えて、其の艶粧は処女の闈に通じ、或ひは是を以て蓬華の戸に栽して、其の幽操は閑翁の棲に協ふ。或ひは是を以て宮人の袂に触れて、何ぞ蘭佩の締に異ならん。或ひは是を以て秋庭の遊に成り、菊籬に対して、同に題すべし）」。

14 該当の箇所は以下の通りである。「偶入詩家、則菅相在前述一時之情、佐国在後見八韻之成。乃知擅秋草之名、而超春花之榮也（偶ま詩家に入れば、則ち、菅相、前に在りて一時の情を述べ、佐国、後に在りて八韻の成を見る。乃ち知る、秋草の名を擅にして、春花の榮を越ゆるなり）」。

15 「鹿鳴」においては、「呦呦鹿鳴、食野之苹（呦呦として鹿鳴き、野の苹を食む）」（第二首、第三首では、「苹」が「蒿」「芩」に変わる）などと詠われ、鹿とともにあるという点でも、はぎと類似している。

16 該当の箇所は以下の通りである。「試就积名而与蕭字伴、則采之懷人、一日不見如三秋兮、且其氣之香、可供神明之羞。唯恨漏詩人之眸、不与彼萃蒿芩、共作鹿鳴呦（試みに积名に就きて蕭の字と伴しければ、則ち之を采りて人を懷へば、一日見はざれば三秋の如くして、且つ其の氣の香、神明の羞に供すべし。唯だ恨らくは、詩人の眸に漏れ、彼の萃蒿芩と共に鹿鳴の呦を作すに与らざるを）」。

17 該当箇所は以下の通りである。「想夫本朝振古翫此花。然唯有名訓、不定其字。故因倭訓曰芳宜乎。中葉以來、倭歌者流吟詠頗

繁、名曰鹿鳴艸。以此花盛與鹿鳴同時也。如所謂杜鵑啼時杜鵑開之類。而遂合艸秋字以定字乎。(想ふに、夫の本朝、古より此の花を翫ぶ。然れども唯だ名訓有りて其の字を定めず。故に倭訓に因りて、芳宜と曰ふか。中葉以來、倭歌者流、吟詠すること頗る繁し。名づけて曰く鹿鳴艸と。此の花の盛りと鹿の鳴くことと時を同じくするを以てなり。所謂、杜鵑ほととぎすの啼く時、杜鵑開くの類の如し。而して遂に艸秋の字を合して以て字を定むか)。

『史記』では、「山居千草之材」を得ることができると記されている。『史記素隱』は、『漢書』の顔師古注を引きながら、「萩、梓木也。可以侯と等しい収入を挙げることができると記されている。『史記素隱』は、『漢書』の顔師古注を引きながら、「萩、梓木也。可以為輶(萩は梓木なり。以て輶なげと為すべし)」と述べている。なお、前掲『和漢古典植物名精解』第四章第四節に、「萩」についての詳細な解説がある。

「萩」を樹木と理解されてしまう可能性については、「芳宜説」にも、次のように言及されている。「芳宜者何也。萩倭訓也。續日本紀有芳宜宴。蓋賞萩花也。史記貨殖傳曰、山居千草之材。漢書材作萩。師古曰、大材曰章萩、即楸樹字也。史註曰、萩梓木可以爲輶。然則萩與楸通而大木也。非本朝所謂萩花之萩也。(芳宜とは何ぞや。萩の倭訓なり。続日本紀(筆者注『続日本後紀』が正しい)に芳宜の宴有り、蓋し萩花を賞するなり。『史記』貨殖伝に曰く、山居千草の材なり。漢書は材を萩に作る。師古の曰く、大材を章萩と曰ふ。即ち楸樹の字なり。史註に曰く、萩梓の木、以て輶と為すべし。然らば則ち萩と楸とは通じて大木なり。本朝の所謂萩花の萩には非ざるなり)。

横山は、同書中の「萩の説」において、『花史左編』中の「観音菊」「天竺花」についての記述を引用し、「これ今の夏萩といふものに形状相かなふ。しかれどもかならず是なりとも定めがたし」と述べている。また、『救荒本草』中の「胡枝子」「随軍茶」に関する記述について言及した後には、『救荒本草』中の「艸零陵香」がはぎであると主張する人物がいることを紹介し、「其の適當なるや否やをしらず」と評している。横山自身は、『広群芳譜』に載る「長楽花」「紫花」がはぎではないかと論じている。このように、江戸時代には、どの植物がはぎにあたるかは、あくまで文献上で判断していたため、様々な意見が提起されていた。『救荒本草』は、最初二巻本が出版され、重刻時に四巻本となり、後に徐光啓の『農政全書』の荒政の部に、徐光啓の評語を付したかたちで収録されたが、松岡は、この『農政全書』版をもとに、さらに『救荒野譜』を合刻する本草書を合わせて出版した。なお、『救荒本草』の意義及び和刻の状況については、白杉悦雄『救荒本草』考(『中国思想史研究』一九号、一九九六年二月)や太田由佳『松岡恕庵本草学の研究』(思文閣出版、二〇二二年)などに詳しい。

和刻本『救荒本草』の序において、松岡は、和漢の呼称のうち、対応関係が明らかかなもので、ながく世に伝えるべきものについ

ては、カナでその旨を記したと述べている。

揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、一九九八年）などを参照。

『鉦雨亭隨筆』と『夢亭詩鈔』とでは、似た内容が書かれているが、『鉦雨亭隨筆』から引用する。「世人多愛桜萩卯花。然此三種、挿瓶中、則風趣索然、不入清賞。或病桜萩無漢名。余謂直用桜萩字、可也。卯花即楊樺花不知卯花之雅。（略）一日河崎生携凹巷先生、詠隨軍茶詩、令余次韻。邦俗以隨軍茶天竺花胡枝子花之類稱萩不<sub>レ</sub>當（略）」世人、多く桜、萩、卯の花を愛す。然れども、此の三種、瓶中に挿せば、則ち風趣索然として清賞に入らず。或ひと、桜、萩に漢名無きに病しむ。余、謂く、直ちに桜、萩の字を用ふれば可なり。卯の花は、即ち楊樺の花なれども、卯の花の雅なるにしかず。（略）一日、河崎生、凹巷先生（筆者注 山口凹巷、すなわち韓聯玉のこと）を携へ、隨軍茶の詩を詠じて、余をして次韻せしむ。邦俗に、隨軍茶、天竺花、胡枝花を以て、萩を稱するも、当たら<sub>レ</sub>ず（略）。冒頭部に、桜や萩、卯の花を瓶に挿してしまふと、その風趣が失われ、觀賞に耐えないことについて述べ、漢名によつてこれらの植物を詠うことは、花の情緒を消すという点で同様の行いであると論じている。

『鉦雨亭隨筆』の次の箇所が該当する。「萩出徐葆光中山伝信録（萩は徐葆光の『中山伝信録』に出づ）。

『琉球国志略』は天保二年（一八三一）に昌平齋から官版が刊行されている。  
近世後期の本草学者小野蘭山は、『救荒本草啓蒙』（天保一三年（一八四二）刊）巻七において、「琉球国史略二萩ノ字ヲ書ス。本邦ノ俗字ニナラヒ誤リ書ナルベシ」（「胡枝子」の項）と述べ、日本の呼称が、何らかのかたちで琉球に伝わり、こうした記述となつたのだらうと推測している。

通常の詩と異なり、和歌題の詩については、題に「萩」の字を用いることが通例であつたようである。六如「行路萩」（『六如庵詩鈔遺編』巻下、「倭歌題」）、菊池五山「雨中萩」「名所萩」（『和歌題絶句』）などがその例に当たる。

『方広寺誌 京都府寺誌稿』によれば、寛政十年（一七九八）に落雷があつたと言ふ。  
王維の詩における「天竺古先生」は、乗如禪師及び蕭居士を指している。

『拾遺都名所図会』巻二（天明七年（一七八七）刊）に「高台寺 萩の花」の挿画がある。

明治期の儒者伊勢小湊が、やはり高台寺において、「金粉凋零門半斜、艦材人尚説豊家。威振海外今安在、滿地殘陽天竺花（金粉 凋零して 門 半は斜めなり、艦材 人は尚ほ豊家を説く。威振 海外 今 安くにか在る、地に滿つ殘陽 天竺花）」（高台寺看胡枝花）転結句、『小湊遺稿』巻下、明治一八年（一八九五）刊」と詠っているのも、同じ効果を狙つたものであらう。

附記 使用した文献は以下の通りである。なお、ウェブ経由で閲覧した場合は、データベース名を次のように墨付括弧で示した。【国会】：国立国会図書館デジタルコレクション、【国文】：国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース、【慶應】：慶應義塾大学 KOSMOS (Google Booksと連携)、【内閣】：国立公文書館デジタルアーカイブ、【琉球】：琉球大学 琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ、【早稲】：早稲田大学 古典籍総合データベース。

『和名類聚抄』：国立国会図書館蔵本（元和三年古活字版、WA七―一〇二）【国会】。国立国語研究所のウェブサイト「日本語史研究用テキストデータ集」より、同書籍のテキストデータを利用。『蔵玉和歌集』：『群書類従』所収本。『古学先生詩文集』：『近世儒家文集』所収本。『秋萩の譜』：国立国会図書館蔵本（特一九〇八）【国会】。『随筆文学選集』第一二卷（書齋社、一九二七年）の翻刻を参照。『秋野七草考』：国文学研究資料館蔵本（長井永太郎文庫、五一―一五四〇）【国文】。『周憲王救荒本草』：内閣文庫本（和刻本、三〇〇―七六）【国会】。『花史左編』：内閣文庫本（紅葉山文庫本、子六八―七）【内閣】。『和爾雅』：国文学研究資料館蔵本（マ三一―一八）【国文】。『大和本草』：国立国会図書館蔵本（特一一二九二）【国会】。『和漢三才図会』：国立国会図書館蔵本（〇三一・二―Te一九四w〇）【国会】。『雑字類編』：東京藝術大学図書館蔵本（DIGITKGLE―二四七五）。『文藻行潦』：国文学研究資料館蔵本（日本漢詩文コレクション、八七―六六）【国文】。『谷口権唱』：国文学研究資料館蔵本（ラ六―七七）【国文】。『鉅雨亭随筆』：早稲田大学図書館蔵本（イ五一―九五）【早稲】。『夢亭詩鈔』：慶應義塾大学メディアセンター蔵本（二二四―三五四）【慶應】。『琉球国史略』：ハワイ大学マノア校図書館蔵本（HW七九七）【琉球】、同（官版、HW七九六）【琉球】。『救荒本草啓蒙』：国文学研究資料館蔵本（特一一七九九）【国文】。『枕山詩鈔三編』：『詩集日本漢詩』所収本、国文学研究資料館蔵本（ナ八一―一八八）【国文】、同（八七―三九）【国文】。『蘆洲詩鈔』国文学研究資料館蔵本（ナ八一―三三八）【国文】。『六如庵詩鈔遺編』：『詩集日本漢詩』所収本。『和歌題絶句』：国文学研究資料館蔵本（松野文庫、五四―二六二）、同（鵜飼文庫、九六―三五〇）【国文】。『嵯峨樵歌』：『詩集日本漢詩』所収本。『報桑録』：『紀行日本漢詩』所収本。『真書太閤記』：内閣文庫本『重修真書太閤記』（二七一―三九）【内閣】、『帝國文庫』翻刻（博文館、一九二八―三〇）を参照。『拾遺都名所図会』：早稲田大学図書館蔵本（文庫六一―一八七四―七）【早稲】。『小松遺稿』：国立国会図書館蔵本（二〇九―二〇）【国会】。